



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 25

May. 2007

## 目次

加崎英男先生ご逝去のお知らせ.....	2
諸報告.....	2
日本植物分類学会第6回大会報告.....	2
新潟大会の見聞録.....	3
第2回大会発表賞・受賞者決定.....	4
大会発表賞受賞者 喜びの声.....	5
日本植物分類学会2007年度第1回評議員会議事抄録.....	7
日本植物分類学会第6回大会総会議事抄録.....	9
会則第5条の変更について.....	11
2006年度事業報告と2007年度事業計画について.....	11
2006年度野外研修会実施報告.....	12
30年ぶりの種子島再訪.....	13
2007年度第1回メール評議員会議事抄録.....	15
庶務報告(2007年2月~4月).....	16
お知らせ.....	16
特別展「花」と白亜紀の花化石のご紹介.....	16
平成19年度 菌学教育研究会 菌類の多様性と分類 前期講座 開催のご案内.....	17
2007年度「信州フィールド科学賞」募集要項.....	18
第2回車軸藻シンポジウムのご案内.....	19
寄稿.....	20
日本における植物画の伝統と系譜.....	20
追悼.....	22
全国を行脚した車軸藻学者、加崎英男先生逝く.....	22
本の紹介.....	23
農業と雑草の生態学：侵入植物から遺伝子組換え作物まで.....	23
北海道の花、日本海草図譜、北海道高山植生誌.....	25
いきもの便り.....	26
ムシできない話・その2.....	26
空飛ぶ精子.....	27
会員消息.....	27

## 加崎英男先生ご逝去のお知らせ

会長 邑田仁

東京都立大学名誉教授加崎英男先生は2007年3月27日、89歳で逝去されました。ここに謹んでお知らせいたします。

加崎先生は車軸藻類の分類を専門とされ、1981年度から1984年度まで(旧)日本植物分類学会会長を努め、学会の発展に尽力されました。先生の追悼文はニュースレター本号に掲載しております。

加崎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 諸報告

### 日本植物分類学会第6回大会報告

大会準備委員長 高橋 正道

第6回大会を2007年3月14日より17日まで、新潟大学医学部有任記念館において開催いたしました。例年、冬の季節は厳しい寒さと横殴りの雪にさらされる新潟ですが、今期の冬は、いたって温暖な日々が2月まで続いていたのですが、分類学会の前週から冬型の寒冷前線が入り、これまでにない寒さが加わってきて雪も混じっている天気の状態のなかで開催されました。

前回の琉球大学での大会と同様に、国立大学が法人化してから、学会の大会のために施設使用料として高額な経費を要求されることは新潟大学でも同じ状況でありました。理学部の事務を相手に、私は「安くしてくれ」「大学として補助金を提供してくれ」と言うひたすら懇願する要求を繰り返しましたが、全く、聞き入れてもらえないばかりか、面積×時間×参加人数×日数をかけると、新潟市で運営しているコンベンションセンターを使用するのほぼ同額かそれ以上であることが告げられました。しかも、理学部キャンパスは、学内のツギハギ予算での耐震工事を長々とやっていますので、まるで、大工場のような騒音が常に鳴り響いており、とても、学会をやれるような状況ではありませんでした。そんな中で、旭町キャンパスの医学部有任会館が破格の価格で使用を認めていただいて、ポスター

のスペースや休憩室でお茶のサービスができないことなど、不安材料がありましたが、なんとか、この手の不便さは参加者に我慢してもらうことにして、植物分類学会を有任会館で開催することを決めたのが、1年前でした。

3月14日には編集委員会と評議員会が開かれました。口頭発表とポスターによる研究発表は15日から17日まで行われました。研究発表は口頭による39題、ポスターによる45題の講演がありました。前回の大会から大会発表賞が設けられ、大会発表賞にエントリーしたのは、口頭で13題、ポスターで21題でした。大会発表賞にエントリーしている口頭発表を第1日目に設定したので、どうしても関連テーマの発表をまとめて全体の発表の流れをスムーズにすることができませんでした。ポスター発表のための十分な時間が確保することができず、会員の一人からキツイお叱りをうけることもありました。ポスター賞の審査のための時間は、もともと夕方にとっておいたのですが、事前に公表することをしませんでしたので、「いったい、どうやって審査するとか?」という疑問がでてきてしまったのかも知れません。

2日目の午前中には一般の研究発表が続き、午後からはポスター発表と総会、学会賞、奨励賞、論文賞、発表賞のそれぞれの受賞者が

発表され、賞状と記念品が授与されました。引き続き、日本植物分類学会賞を受賞された矢原徹一氏ならびに奨励賞を受賞された坪田博美氏、米倉浩司氏、藤井紀行氏による受賞記念講演を行いました。3日目には、午前中に一般の研究発表を行い、午後から公開シンポジウム「新生代の地球環境変遷と地域フロラの分化プロセス」のテーマで、7氏による5題の発表と総合討論を行いました。シンポジウムの具体的内容については「分類」の誌上で公表されることになっております。県内外や新潟市からも公開シンポジウムに参加されて、魚沼層群の植物化石などの講演を興味深く聴かれる市民の姿も見られました。

懇親会は、ホテルイタリア軒で開催されました。懇親会では、新潟古町の芸妓さんの踊りを見せていただきました。古町（新潟）の芸妓さんは、祇園（京都）、新橋（東京）と



懇親会に登場した芸妓さん。(撮影：編集人)

もに、日本三大花柳界として有名です。踊りのあとは、芸妓さんらが、大会の参加者の皆さんの輪の中に入って、懇親会も最高潮に盛り上がっていたようです。イタリア軒では、新潟の新鮮な魚介類の料理をはじめ、コシヒカリのおにぎりなどの新潟の食材をふんだんに使った料理を用意していただいたのですが、参加された皆さんが食べることへのエネルギーを爆発させている姿をみていたイタリア軒のホテルマンが、植物分類学会というので、私のような年代ばかりが集まると思っていたことを白状していました。私の個人的な感覚からすれば、もう少し料理の盛り付けに工夫があってもよかったですのではないかと思います。私のも含めて新潟の風土がそのままできてきたことですので、全てが新潟らしさとしてご理解いただければ幸いです。新潟県の有名な酒造メーカー各社のご協力と支援により、県内でもめったに手に入らない新潟の銘酒の数々を提供していただきました。私の挨拶でも申し上げましたが、これらの多くの酒造会社の皆さんは、中越地震から復興のために日夜奮闘してきた方々です。酒造会社の方々の悩みは、「新潟の酒」が、品質を管理できないブローカーらの利益追求のためだけに利用されていることだそうです。

ご参加いただきました皆様、どうもありがとうございました。

## 新潟大会の見聞録

平原 友紀（岡山理科大学）

私は2007年3月14～17日に開催された日本植物分類学会第6回大会（新潟大学）に参加し、ポスター発表をさせていただきました。また、懇親会にも参加し、カヤツリグサ科の研究について多くの先生方や仲間達と意見を交換することができました。

今大会は奨励賞、論文賞、大会発表賞が設定されたこともあり、熱意のある研究発表が充実しており、興味が尽きることはありません

でした。特に、私もエントリーした大会発表賞は若手研究者や学生にとって檜舞台であり、他大学の先生方から評価をいただける良い機会であったと思います。同輩達が緊張感と熱意を持って、発表に勤しむ姿はまぶしく、自然と熱い気持ちになりました。今後も、より良い発表が行えるように彼らとともに精進したいと思います。また、奨励賞の記念講演では、坪田先生の分子系統学的研究、米倉先生

の植物学名の問題、藤井先生の系統地理学的研究について、研究を始めたきっかけから現在に至る過程の発表が行なわれました。これらの講演から、私は問題点を的確に捉え、様々な切り口から解析する重要性和、柔軟に新しい手法を取り入れる必要性を改めて認識することができました。

各賞の受賞が行なわれた後の懇親会は、祝賀ムードに包まれるとともに、積極的な意見の交換の場となりました。まさしく、「懇親会こそ本番」という名言？が当てはまる会であったと思います。特に、越後の銘酒が揃えられたブースはひとやまができており、会話の潤滑油としてのお酒の機能が十二分に発揮されていました。こうした地方の特産品も学会の

醍醐味だと思います。

最後になりますが、大会の開催に御尽力下さいました高橋正道先生および新潟大学の皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



ずらりと並んだ銘酒。おいしかった。(撮影：編集人)

## 第2回大会発表賞・受賞者決定

大会発表賞選考委員長 村上 哲明

昨年に引き続いて、村上が選考委員長を務めさせていただいた。研究対象分類群も専門分野も多様な12名の研究職に就いている選考委員に加えて、今年は、昨年の大会発表賞・受賞者の4名(すなわち、少なくとも昨年は研究職に就いていなかった若手研究者)にも選考委員として加わっていただいた。このようにしたのは、大会発表賞の審査過程の透明性を高めるとともに、審査員の多大なる負担の結果、受賞者が選ばれたことを受賞者自身にも実感して欲しいと考えたからである。審査をするのは、本当に大変な作業である。特に多数のポスター発表を公平かつ厳正に審査しようとする、自分の興味のあるポスターをじっくり見ている時間がなくなったり、場合によっては自分のポスター発表までおろそかになってしまうこともあった。特にポスター発表賞の審査方法については、まだまだ工夫が必要かも知れない。いずれにしても自己犠牲の下に審査を行ってくださった選考委員の皆さん、そして採点結果の集計作業などを手

伝ってくださった学会執行部の坪田博美さん、五百川裕さんには心よりお礼を申し上げたい。

さて、大会発表賞の審査の方法は昨年と全く同様に、発表している研究内容の学問的価値を5点満点、発表のうまさ(ポスターの場合は、視認の良さ)を3点満点で評価をし、それらの合計点にもとづいて受賞者の選考を行った。実際に、これらの合計点で最上位に来るには、発表のうまさでも最高点の3点をとることが非常に重要なようである。来年以降、大会発表賞にエントリーされる皆さんは、いかにして自分の研究の学問的価値をうまくアピールし、内容をわかってもらいやすくするか、発表方法についても色々工夫をしていたらと思う。このような工夫をすることが、発表技術の向上にもつながると考えるからである。

最後に、今年は最終的に口頭発表賞に13件、ポスター発表賞に19件のエントリーがあり、第2回大会発表賞の受賞者は以下のようになった(50音順)。

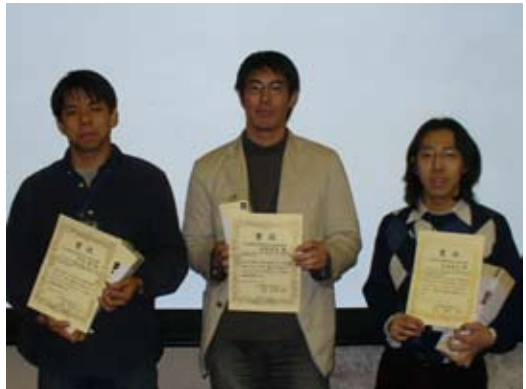
## 口頭発表賞

仲田崇志（東京大・院・理・生物）「18S リボソーマル RNA と *rbcl* 遺伝子に基づく分子系統解析と、微細構造に基づくヤリミドリ属 (*Chlorogonium*) の分割」

中村剛（琉球大・院・理工）「サツマイナモリ *Ophiorrhiza japonica* Bl. (アカネ科) の四倍体変種における二型花柱性の崩壊」

## ポスター発表賞

岩崎貴也（京都大・院・理・植物）「日本に分布する温帯林の分子植物地理学的研究」



受賞者の左から中村氏, 岩崎氏, 仲田氏。(撮影: 編集人)

## 大会発表賞受賞者 喜びの声

**編集人 (以下, 編) :** こんにちは。先日の日本植物分類学会新潟大会では大会発表賞の受賞おめでとうございます。まず、皆さん簡単に自己紹介をお願いします。

**中村氏 (以下, 中) :** 琉球大学の中村剛と申します。この春に大学院を修了し、今年度は琉球大学の COE プログラムでポストドクをしています。大学院では、琉球-台湾地域を中心にサツマイナモリ属 (アカネ科) の分類と生物地理学的研究を行ないました。また島嶼間でのフロラの分化にも興味を持っており、そのパターンと分化要因についても解析を行ないました。今回の発表では、サツマイナモリの四倍体変種における二型花柱性の崩壊を報告し、倍数化と繁殖様式の変化との相関の意義について考察するとともに、四倍体変種の分類学的位置づけを見直しました。

**仲田氏 (以下, 仲) :** 東京大学大学院理学系研究科の博士課程に在籍しています。専門は微細藻の分類学ですが、生物の系統・進化・分類全般に興味を持っています。もともと分類表を作るのが趣味で、その中で研究が不足しているところを自分の手で埋めたいと思い、緑藻綱オオヒゲマワリ目の分類に手をつけました。博士課程では紡錘形の細胞が特徴的なヤリミドリ属 (*Chlorogonium*)

の系統・形態分類を研究しています。最終的には形態分類と系統分類を調和させるのが目標です。

**岩崎氏 (以下, 岩) :** 3月の学会時には京都大学大学院・理学研究科の M2 だった岩崎貴也です。指導教官の村上哲明先生の異動に伴い、1年前から首都大学東京の牧野標本館の方へ移って研究を行っていましたが、この4月からはそのまま首都大の博士課程に編入しました。第四紀、特に約2万年前の最終氷期最盛期以降の温帯林の分布変遷について、系統情報を用いない複数種比較というアプローチで分子植物地理学的研究を行っています。

**編 :** では早速ですが、受賞が決まったときの感想をお願いします。

**中 :** 学生としては最後の発表でしたので、うれしかったです。

**岩 :** 正直に言って、まさか賞をいただけるとは思っていなかったのが本当に驚きました。修士論文の中のメインの内容をまとめたポスターだったので、タイミング的にも大変嬉しかったです。また、前年の植物分類学会の際にはあまり良い発表が出来なかったもので、うまくリベンジ?が出来てよかったです。

**仲**：自分の研究発表が評価されたことは素直に嬉しかったです。ただ発表内容には100%満足はしていなかったもので、そのギャップを今後埋めていかなければならない、とプレッシャーも感じました。

**編**：ズバリ、賞を取る自信はありましたか？

**中**：受賞できるといいなどは思っていました。しかし、むしろ自分なりに良い発表ができれば良いと思っていました。

**岩**：受賞ということに関しては、はっきりいって自信は全くありませんでした。ただ、修士論文の公聴会や他の研究室のセミナーなどで、研究内容に関して好意的な意見を比較的多くいただいていたので、少しは良い評価をもらえるかな？という程度でした。

**仲**：自信がなかったというと嘘になりますね（笑）。

**岩・中・編**：おおー（驚）。

**仲**：論文執筆のためのデータがほぼ揃ったところで発表ができたことと、喋りや質疑応答で失敗がなかったことで、後は審査員の先生方との相性の問題かな、と思っていました。

**編**：発表で特に工夫した点を教えて下さい。

**岩**：私は説明をだらだらと書いてしまう傾向があるので、簡潔に表現できるように説明部分の文章に特に注意してポスターを作りました。研究室の先輩のSさんやKさんにも見ていただいて、何度も文章は直しました。図と大きな文字を追うだけで大体の流れが分かっていただけのようなものができたのではないかと思います。また、色についてもあまりカラフルにし過ぎず、強調したいところだけを強調できるようなシンプルな色使いを心がけました。

**編**：フムフム（頷）。では中村さんと仲田さんは口頭発表ならではの留意点はありました

か？

**中**：話の構造が明瞭であるように気をつけました。つまり、導入で提示したいいくつかの疑問に対し、それぞれの結果、考察の対応関係を分かりやすくしようと心がけました。また、15分間しかない発表ですので、あまり重要ではなく、話の構造が分かり難くなるような部分は、大きく省略しました。

**仲**：人それぞれのやり方だと思いますが、私は発表原稿を通常用意しません。代わりにスライドにキーワードを散りばめて、それを見ながら話すべき内容を思い出すようにしています。それでスライドも分かりやすくなるのではないかと。後は時間配分ですね。散々練習もしましたし、各スライドごとに所要時間と累積時間を書き加えたプリントアウトを手元に用意して、ストップウォッチと比較しながら発表しました。時間を守って質疑応答の時間を確保するのも大切だと思っています。

**編**：では発表で大変だった点はありますか？

**岩**：研究内容に関しては1か月以上前に修士論文でまとめ終わっていたので、発表準備の時には特に苦労しませんでした。もちろん修論執筆の際には、このデータからどこまでが信頼性をもって言えるのか？どういった論理展開にすれば分かりやすいか？など、指導教官の村上先生をはじめ多くの方々にアドバイスをいただきながら、かなり苦労してまとめました。

**仲**：スライドの締め切りが早かったので、後で気づいたスライドの問題点を口頭でフォローするのに苦労しました。もう少し提出を遅らせていただければ、当日か前日に修正を許していただけると助かりますね。他には研究室の発表練習で徹底的に叩かれ…いえ、アドバイスを頂きまして、それを全て盛り込もうと努力しました。結果的に受賞できたのは、研究室の皆さんのおかげだ

と思います。発表賞の賞品に日本酒を頂いたのですが、私はお酒が飲めませんので研究室へのお礼にあてようかと（笑）。

**中：**私もパワーポイントを送って時間が経つと、直したい部分が出てきました。そういった部分は、スライドとの矛盾を感じさせないように、話す言葉で補いました。

**編：**なるほどですね。皆さんは次回大会発表賞の審査員となるわけですが、最後にこれから受賞を目指す方々へアドバイスをお願いします。

**仲：**自分の研究を客観的に理解することが大事だと思いました。聞き手の興味と自分の伝えたいことが食い違っていることがよくありますが、その橋渡しができれば、良い発表になるんだと思います。そこから質疑応答の中で発展的な議論が起こって学会が盛り上がればなおいいですね。

**中：**私の発表内容は既に論文にまとめて雑誌に投稿したものでした。既に論文投稿している内容であれば、レフェリーとの議論を

経ていることもあり、まとまりがよい研究に見えるのではないかと思います。また、これはアドバイスではないのですが、学会賞の英語表記があれば英語による履歴書を書く際などに便利かと思います。

**岩：**自分の研究とは密接に関係していないような研究をされている方でも興味をもってくださるような発表を心がけることが何より大事だと思います。それには、細々とした内容よりも、研究の大きな流れや面白い点を簡潔に分かりやすく説明することが重要だと私は考えています。来年は私の所属している首都大学東京で植物分類学会が行われます。何が賞品になるかは分かりませんが、村上先生と相談して皆さんに喜んでいただけるようなものをきっと準備しておきますのでぜひ頑張ってください！

**編：**ありがとうございました。皆さんのますますのご活躍を期待しています！

注) 受賞者からのメールを基に本人の了承を得て座談会風に編集してあります。

## 日本植物分類学会 2007 年度第 1 回評議員会議事抄録

庶務幹事 五百川 裕

会場：ホテルイタリア軒会議室

日時：2007 年 3 月 14 日 16:00～20:00

参加者

評議員：( ) 内は被委任者 評議員出席 10, 委任状出席 2

出席 (10 名)：梶田 忠, 黒沢 高秀, 高宮 正之, 田村 実, 出口 博則, 永益 英敏, 西田 佐知子, 西田 治文, 藤井 伸二, 村上 哲明

欠席 (2 名)：野崎 久義 (永益氏に委任), 綿野 泰行 (議長に委任)

幹事会等：( ) 内は役職

出席 (14 名)：邑田 仁 (会長), 五百川 裕 (庶務), 海老原 淳 (会計), 鈴木 武 (図書), 東 隆行 (ニュースレター担当), 坪田 博美 (ホームページ担当), 岡田 博 (編集委員長), 永益 英敏 (英文誌編集担当), 秋山 忍 (和文誌編集担当), 菅原 敬 (植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当), 西田 治文 (自然史学会連合担当), 布施 静香 (講演会担当), 柏谷 博之 (絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会委員長), 伊藤 元己 (植物データベース専門委員会委員長)

欠席 (3 名)：加藤 雅啓 (前学会賞選考委員会委員長), 矢原 徹一 (絶滅危惧植物・移入植

物専門第一委員会委員長), 大橋 広好 (国際植物命名規約邦訳委員会委員長)

1. 評議員会開催にあたり, 邑田会長から挨拶があった。
2. 五百川庶務幹事により, 定足数が確認された。会長・評議員出席 11, 委任状出席 2 で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として西田治文氏を選出された。議事録署名人として黒沢高秀氏と高宮正之氏を選出された。
4. 報告事項
  - 4.1 自然史学会連合報告 2006 年度の活動状況と検討課題 (博物館のあり方問題等)。
  - 4.2 日本分類学会連合報告 第 6 回総会 (事業報告, 決算, 事業計画, 予算, 監査委員交代等), 2007 年度公開シンポジウム。
  - 4.3 植物分類学関連学会連絡会報告 連絡会主催シンポジウム (2006 年度実施, 2007 年度準備状況)。
  - 4.4 各種委員会に関する報告
    - (1) 編集委員会 英文誌『APG』, 和文誌『分類』の編集状況および編集体制変更。電子投稿, ISI 登録申請検討中。
    - (2) 学会賞選考委員会 第 6 回日本植物分類学会賞の選考, (学会賞 1 名 (他 1 名は辞退), 奨励賞 3 名)。
    - (3) 論文賞選考委員会 第 1 回論文賞の選考。
    - (4) 植物データベース専門委員会 2006 年度の活動状況, 日本産植物和名 - 学名辞書作成中。
    - (5) 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会 レッドリスト作成状況。
    - (6) 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会 レッドリスト作成状況。
    - (7) 国際植物命名規約邦訳委員会 邦訳進行状況。今夏出版予定。
  - 4.5 図書関連報告 学会図書の状況, 電子図書館サービスおよび機関リポジトリ。
  - 4.6 日本植物分類学会講演会報告 2006 年度実施, 2007 年度準備状況。
  - 4.7 ニュースレターに関する報告 発行状況, 印刷業者変更, Web 公開継続。
  - 4.8 ホームページ関連報告 Wiki 導入, メーリングリスト整備検討。
  - 4.9 その他の報告
    - (1) 野外研修会予定
  - 4.10 会務報告 会員数等
  - 4.11 会計報告
5. 審議事項
  - 5.1 2006 年度事業報告書 (案) について  
五百川庶務幹事より 2006 年度事業報告 (案) が提案され, 11 項目の追加, 訂正が行われた後, 承認された。
  - 5.2 2006 年度決算報告 (案) について  
海老原会計幹事より 2006 年度決算報告 (案) が提案され, 3 項目の削除, 訂正が行われた後, 承認された。
  - 5.3 2007 年度事業計画 (案) について  
五百川庶務幹事より 2007 年度事業計画 (案) が提案され, 4 項目について追加, 訂正, 削除が行われた後, 承認された。



#### 5.4 2007 年度予算（案）について

海老原会計幹事より 2007 年度予算（案）が提案され、赤字理由についての質疑、対処法の検討要望があった後、承認された。

#### 5.5 次期監事候補の推薦について

邑田会長より益山樹生氏、白岩卓巳氏を候補とすることが提案され、総会における評議員会推薦候補者として承認された。

#### 5.6 会則第 5 条の改訂について

邑田会長より本会の会員の権利については、「会員の権利と会費についての細則」第 1 条に定められているが、会則には会員の権利に関する記載が無いことが説明され、この不具合を解消するための改訂原案が 2 つ提案された。質疑の後、現行の会則第 5 条の末尾に、「2 本会の会員の権利については別に細則を定める。」を追加する案が承認された。

#### 5.7 名誉会員の推薦について

邑田会長より会員在籍期間 50 年以上の大田久次氏、小宮定志氏、鈴木昌友氏の 3 名を総会において推薦することが提案され、承認された。

#### 5.8 大会発表者の資格について

邑田会長より問題点等の説明があり、次回の評議員会で継続審議することとなった。

#### 5.9 その他

##### (1) 第 7 回大会開催地について

邑田会長より首都大学東京での開催日程案について説明があり、承認された。

##### (2) 学会誌掲載内容の転載許可担当評議員の選出について

英文誌編集責任者の永益英敏氏が推薦され、承認された。

##### (3) 千葉大学学術情報リポジトリへの雑誌掲載論文の登録・公開の許可について

五百川庶務幹事よりリポジトリの説明等があり、次回評議員会で検討することとなった。

##### (4) 総会議事について

五百川庶務幹事より 2007 年度総会議事次第（案）が説明され、承認された。

邑田会長より議長に西田治文氏を推薦したいとの提案があり、承認された。

## 日本植物分類学会第 6 回大会総会議事抄録

庶務幹事 五百川 裕

会場：新潟大学医学部有壬会館

日時：2007 年 3 月 16 日 14：00～15：10

1. 総会に先立ち邑田会長から挨拶があった。
2. 総会に先立ち高橋正道大会大会準備委員長より挨拶があった。
3. 五百川庶務幹事より総会出席者数が 73 名であることが報告された。
4. 西田治文氏が議長に選出された。
5. 報告事項

#### 5-1 会務報告

前年度の事業報告と決算報告が、五百川庶務幹事と海老原会計幹事よりそれぞれ行われた。

最近逝去された学会員に対して黙祷が行われた。

#### 5-2 各委員会からの報告

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会

矢原委員長より植物 RDB 見直し調査について、ほぼ終了したこと、および前回 2000 年版と比較した各ランク判定種の増減等紹介を含めて報告があった。

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会

五百川庶務幹事より植物 RDB 見直し調査について、ほぼ終了したこと、および対象種増加の理由等を含めて報告があった。

- ・植物データベース専門委員会

伊藤委員長より前年度の活動報告がなされた。学名・和名のリストの整備に関連して質疑があった。

- ・国際植物命名規約邦訳委員会

永益副委員長より進捗状況について、今夏出版予定、出版費の学会特別会計からの支出依頼を含めて報告があった。

- ・編集委員会

岡田編集委員長より前年度の編集出版状況について、APG 3 号遅延、ISI 登録検討についての説明を含めて報告があった。

## 6. 審議事項

- ・第一号議案 2006 年度事業報告書並びに 2006 年度決算報告書承認の件

会務報告で説明のあった上記 2 件について、吉田監事より、会務および会計が適切に行われているとの監査報告がなされた。審議の結果、異議なく承認された。

- ・第二号議案 2007 年度事業計画案並びに 2007 年度予算案承認の件

五百川庶務幹事および海老原会計幹事より上記 2 件について説明があり、邑田会長からの単年度赤字に関する補足説明、および学会誌についての質疑の後、異議無く承認された。

- ・第三号議案 監事の選出

西田治文評議員（2007 年度第 1 回評議員会議長）より、次期監事候補者として益山樹生氏と白岩卓巳氏が推薦され、異議無く承認された。

- ・第四号議案 会則第 5 条改定について

邑田会長より、本会の会員の権利については、「会員の権利と会費についての細則」第 1 条に定められているが、会則には会員の権利に関する記載が無いことから、この不具合を解消するために、第 5 条に「2 本会の会員の権利については別に細則として定める。」との第 2 項を追加する改定を行いたいとの提案がなされ、出席会員 73 名のうち 69 名の賛成により承認された。

- ・第五号議案 名誉会員の推薦について

邑田会長より、本会 50 年以上在籍会員である、大田久次氏、小宮定志氏、鈴木昌友氏の 3 名を名誉会員候補とすることが評議員会において承認されたことが報告され、3 氏を名誉会員として推薦する提案がなされ、異議無く承認された。

## 7. その他

### 7-1 第 7 回大会開催地について

邑田会長より、次回大会を首都大学東京に於いて平成 20 年 3 月 21 日から 23 日に開催することが報告された。

## 7-2 野外研修会予定について

邑田会長より、岡山理科大学の池田博氏のお世話で阿哲地域の植物観察をテーマとして平成 19 年 5 月 26 日から 27 日に開催することが報告された。

**会則第 5 条の変更について**

庶務幹事 五百川 裕

2007 年度の第 1 回評議員会および総会において会則第 5 条の変更が承認されましたので、報告いたします。これは、本会の会員の権利について「会員の権利と会費についての細則」第 1 条に定められているにもかかわらず、会則においては会員の権利を細則で定める旨の記載が無かった不具合を解消するための変更です。第 5 条に以下のように第 2 項が追加されました。

第 5 条 2 本会の会員の権利については別に細則として定める。

附則 本会則は 2007 年 3 月 16 日より実施する。

**2006 年度事業報告と 2007 年度事業計画について**

庶務幹事 五百川 裕

ニュースレター No.24 に掲載した 2006 年度事業報告（案）および 2007 年度事業計画（案）は、以下のような改訂の後、評議員会および総会で承認されましたので、報告いたします。

2006 年度事業報告（案からの改訂点）

- ・(1) の第 1 項目末尾の「予定」を削除。
- ・(1) の第 2 項目の「第 5 回大会」の次に「・総会」を追加。
- ・(1) の第 3 項目末尾の「ニュースレター No.24」を「ニュースレター No.25」と訂正。
- ・(1) の第 4 項目冒頭の「評議員会を 2 回」の次に「(ニュースレター No.21,23 で報告)」を追加。
- ・(1) 第 4 項目の「メール評議員会を 3 回」の次に「(ニュースレター No.21,24 で報告)」を追加。
- ・(1) の第 4 項目の「開催し、」を「開催した。」と訂正し、以下を削除。
- ・(2) の第 1 項目の「(計 2 冊, 3 号は年明けに発行予定) を発行した。」を「(計 2 冊) を発行した (3 号は 2007 年 1 月発行。)」と訂正。
- ・(3) の第 5 項目末尾に「(3 月に発足, ニュースレター No.21 で報告)」を追加。
- ・(3) の第 6 項目末尾の「予定」を削除。
- ・(6) の第 5 項目を削除。
- ・(6) に「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設事業（仮称）に係わる環境影響評価図書案」に関する意見書を那覇防衛施設局長へ会長名で提出した（ニュースレター No. 21 で報告。）および「沖縄科学技術大学院大学（仮称）整備事業に係わる環境影響評価準備書」に関する意見書を独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構理事長へ会長名で提出した（ニュースレター No. 21 で報告。）を追加。

2007 年度事業計画（案からの改訂点）

- ・(1) 第 2 項目の「(3 月 14 ~ 17 日)」の次に「・総会」を追加。
- ・(1) の第 4 項目として「・評議員会を開催する。」を追加。
- ・(2) の第 1 項目の「Geobotanica」の次に「第 57 巻 3 号」を追加し、「(計 3 冊)」を「(計 4 冊)」と訂正。
- ・(6) の第 5 項目として「・国際植物命名規約日本語訳版を出版する。」を追加。

## 2006 年度野外研修会実施報告

会長 邑田仁

2006年の野外研修会は、屋久島の陰に隠れて目立たないけれど、実は植物の宝庫であり、かつ現地調査が容易な所として、種子島を見直そうという意図で行った。ヤッコソウの時期に合わせるということで11月に設定した。現地の植物事情に詳しい、独立行政法人医薬基盤研究所薬用植物資源研究センター種子島研究部リーダー香月茂樹さんと元同試験場作業長鍋木紘一さんに案内をしていただいた。

第1日目(11月10日)は種子島空港に11時に集合し、マイクロバスでまず薬用植物資源研究センターを訪問した。時々雨が降る中、センター内で栽培されている、種子島では野生絶滅したモンパノキ、タカクマムラサキを始めハマジンチョウ、タコノキ、オオハマギキョウ、果実をつけたソテツなどを観察、写真撮影を行った。また温室内では、熱帯の薬用植物であるジャクダン、チョウジ、キナノキ、ハイビスカスティーになるローゼル等を観察することができた。

その後、国道58号線を宿泊地に向かって南下した。途中、坂井神社の日本一の大ソテツやアコウ、オガタマノキを観察した。マンガローブが発達する熊野阿嶽川河口域ではメヒルギ、ハマジンチョウ、ケウバメガシ、オオバヤドリギ、クチナシ、クロキ、シャリンバイを見ることができた。千座の岩屋付近ではケウバメガシ、ヘツカリンドウ、ハチジョウシュスラン、ハマサルトリイバラ、シャリンバイ、マサキ、ホソバワダン、ボタンボウフウが見られた。このあたりから雨が強く降り出したが、茎永の赤米館で赤米の栽培についての展示を見てから、宝満神社の参道、境内でセンダン、コウシュウウヤク、ナタオレノキ、イヌマキ、スダジイ、ハラン、ボウラン、ガジュマル、カカツガユ、ナギ、ヤブツバキ、



県民の森のヤッコソウ。(撮影：邑田仁)

カンコノキ等を観察した。

当日は南種子町にある門倉亭南荘に宿泊し、夕食時に懇親会をおこなった。知る人ぞ知る香月さんの毒舌が炸裂する中、鍋木紘一さんに、種子島の特色ある野生植物について写真を映写しながら説明して頂いた。巨大なタカツルランとその花の鮮明なクローズアップをはじめ、見たこともない写真がいろいろ登場し、圧巻であった。

第2日目(11月11日)。前夜から朝方に掛けての大雨も上がり、マイクロバスでホテルを出発して一気に北上した。まず、中種子町浜津脇でガジュツ栽培地を見学してから、本命である西之表市いこいの森を訪ねた。よく発達したスダジイの林であり、これに寄生するヤッコソウがちょうど盛りだった。また、アオノクマタケランの果実が赤く実って美しかった。そのほかクワズイモ、センリョウ、カギカズラ、アコウ、カクレミノ、シヨウベンノキ、ツマベニチョウの幼虫のついたギョボク、ウラジロガシ、ヤブツバキ、ヤマザクラ、リュウビンタイ、オオタニワタリ、コンテリクラマゴケ、植え戻しにより保護されているエビネの群落などが見られた。道ばたではサネカズラ、ゴンズイやテイカカズラの果実がみられた。上西小学校・伊勢神社でセンダン、ボウラン、ヤクタネゴヨウ、ヤッコソウ、ス

ダジイ、ヒトツバを観察した後、昼食となった。

午後は、種子島開発総合センター（鉄砲館）で昆虫標本や考古資料を含む種子島の資料を見た後、西之表市住吉のガジュマル防潮林付近でイボタクサギを観察。最後に西之表市花里海岸でツキイゲ、ハマオモト、テリハノイバラ、ハマサルトリイバラ、オオハマボウ、マルバニッケイなどを見た後、午後5時に種子島空港着で解散した。

今回の研修会は会員15名、会員外の飛び入り1名が参加して行われた。短い日程のなかで目的の植物が観察でき、採集もできて、研修会としての目的は達成できたと思う。事前の手配から現地観察までとてもお世話になった香月さんと鍋木さんに厚くお礼申し上げます。



記念撮影：「日本甘藷栽初地之碑」の前で。先にお帰りになった方、ごめんなさい。つまりサツマイモはここで最初に試作されたということですね。「甘藷試作跡の碑」を持つ東大植物園の職員としてはやはり負けたいべきなのではないでしょうか。

### 30年ぶりの種子島再訪

山住 一郎

このたびの野外研修会は、私にとって30年ぶりの種子島行きとなった。もともとは土壌微生物が専門で、当時は「放線菌の分類学的研究」がテーマであった。このときの種子島行きも土壌採取を兼ねたものであった。昭和50年2月6日のことである。

当時、大阪から種子島へは伊丹15:15発の直行便があった。今となっては懐かしい東亜国内航空(TDA)のYS-11型機(プロペラ機)で、種子島空港まで2時間少々飛行であった。その日は島の東側の熊野海岸にある国民宿舎「つまべに荘」に宿泊した。今回、1日目のマイクロバスでの移動中に熊野海岸を通ったが、当時、3階建ての立派な国民宿舎のあったところはすっかり様子が変わっていた。平成4年に「中種子町温泉保養センター」に建て替えられたとのことである。国民宿舎のすぐ目の前が砂浜で、窓から熊野海岸が一望でき、素晴らしい光景であったことを覚えている。

翌日の昭和50年2月7日は、曇り空に時折小雨のぱらつくあいにくの天気であったが、

厳冬の大阪とは違い、温暖な気候にさすが南国と感心したものである。島内の移動は主に路線バスであった。車内には、当時の歌手のヒット曲が流れ、なんともんびりとした光景であったことを覚えている。その日の午前中は熊野海岸から阿嶽川方面を歩いた。スタジイ、マテバシイ、シャリンバイ、ケウバメガシなどがあり、林床にはハチジョウシュスラン、アオノクマタケランなどが見られた。クチナシが3~4mにも生長し、こんなに大



図1. メヒルギの群落 (2006年11月18日, 阿嶽川河口。撮影: 山住一郎)



図2. メヒルギ(2006年11月18日,阿嶽川河口。撮影:山住一郎)

きくなるものなのかと驚いたのを覚えている。ハマサルトリイバラもはじめて見るものであった。さらに、ハマジンチョウ、メヒルギの自生地まで足を伸ばした。今回は阿嶽川河口の県道沿いにマイクロバスを止めていただき、メヒルギ(図1-3)など河口域の植物を、当時のことを思い出しながら観察することができた。

2月7日の午後は坂井神社の日本一の大ソテツを見たあと、中種子町野間の中央公園を訪れた。公園というより立派な植物園という感じであった。園内の中央に大きな噴水があり、それを取り巻くように放射状にカナリヤシ(?)が植栽されていたのを記憶している。突然の訪問者である私に技師の方が園内の植物を詳しく説明してくださった。ガジュマルやアコウもそのとき初めて教えていただいた。園内にはハクサンボクがたくさん植栽されており、艶やかな葉をした常緑のガマズミ属の植物は大変珍しかった。挿し木で簡単に着くと教えていただき、ガジュマルとハクサンボクの枝を切っていただいた。今回、寄る機会はなかったが、現在、中央公園はどうなっているのだろうか。

中央公園の植物を見たあと、島間から屋久島へ向かう予定であったが、海が荒れて船が欠航となった。天候の回復が遅れるとのことで、屋久島行きをあきらめ、そのまま西之表へ行き、最終のフェリーで鹿児島へ向かった。



図3. メヒルギ・ハマジンチョウ自生地看板(2006年11月18日,阿嶽川河口。撮影:山住一郎)

これが初めての種子島行きであった。

今回の野外研修会では、薬用植物資源研究センター種子島研究部の香月先生・鍋木先生、そして幹事の皆様の周到な準備とご指導によりいろいろな植物を観察することができた。薬用植物資源研究センターでは栽培されている薬用植物・資源植物を懇切丁寧にご説明いただき(図4.ハマジンチョウ)、また、種子島の植物観察ポイントをマイクロバスで効率よく回っていただき、多くの自生植物を観察することができた。種子島は平坦な島で、開発が進んではいるが、多様で豊かな植物相をはぐくむ島であることを再認識することができたのも大きな収穫であった。心よりお礼申し上げます。

最後に、今回私がとくに注目をしていたシダ植物について、2日目の西之表市「いこいの森」で観察された種をリストアップさせて



図4. ハマジンチョウ(2006年11月18日,薬用植物資源研究センター種子島研究部にて。撮影:山住一郎)

いただく。1時間30分ほどの滞在であったが、多くのシダが観察された。紀伊半島南部の暖地性のシダフロラと共通する点も多く、たいへん魅力的な地域である。ぜひ、あらためて調べてみたいと思っている。

トシダ, アマクサシダ, ハチジョウシダ, ヘゴ, ホソバカナワラビ, コバノカナワラビ, ヘツカシダ, カツモウイノデ, シロヤマシダ, コクモウクジャク, ニセコクモウクジャク, オキナワコクモウクジャク, ヘラシダ, ミゾシダ, ホシダ, ケホシダ, コハシゴシダ, アラゲヒメワラビ, オオタニワタリ, オオイワヒトデ, ジロ, コシダ, エダウチホングウシダ, フモマメツタ, ノキシノブ

## 2007年度第1回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 五百川 裕

2007年1月24日から2007年2月2日にかけて2007年度第1回メール評議員会が開催されました。この会議は、第6回新潟大会の開催準備にあたり、発表申し込み者に非会員が多数おられることが明らかとなり、特に、会員顕彰を目的とした大会発表賞エントリー者にも非会員がおられたことから、その対応について審議するために開催されたものです。

開催日時：2007年1月24日～2007年2月2日12:00

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

議長として邑田仁氏が選出された。

審議事項

第1号議案：非会員の第6回新潟大会での発表および発表賞エントリーへの対処

第2号議案：次回大会からの大会発表者を会員に限定するかどうか

審議結果

・第1号議案について質疑、意見交換の後、会長より対処法を3つに分割して原案が出され、それぞれ審議した。

原案1-1：非会員の第6回新潟大会での発表については、「非会員の発表者（講演者）全員に会長名で入会のお願いを送る。また、大会時には指導教員などにも、学生等の入会をすすめてもらうよう呼びかける。」

原案1-2：非会員の第6回新潟大会発表賞エントリーについては、「非会員の大会発表賞エントリー者には、会則（細則）で学会賞の授賞は会員に限定されていることを説明して入会を勧めるお願いを送る。」

原案1-3：非会員の第6回新潟大会発表賞選考については、「今回に限り会員、非会員を区別せず選考を進めるが、授賞候補となった発表者が最終的に会員でなかった場合には授賞対象としない。」

その結果、

原案1-1は承認8、非承認1、白票4で、承認された。

原案1-2は承認9、非承認0、白票4で、承認された。

原案1-3は承認7、非承認2、白票4で、承認された。

・第2号議案について質疑、意見交換の後、会長より次の原案が出された。

原案：3月14日開催の2007年度第1回評議員会で審議する。

原案は承認9、非承認0、白票4で、承認された。

・議事録署名人として梶田忠氏と村上哲明氏が選出された。

## 庶務報告 (2007年2月～4月)

庶務幹事 五百川 裕

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・ 大学病院医療情報ネットワーク研究センターによる WWW データベース学会情報のデータを更新した (2月9日)。
- ・ 日本学術会議による「学協会の機能強化方策検討のための学術団体調査」に回答した (2月28日)。
- ・ 旧日本植物分類学会会長加崎英男氏葬儀にあたり生花と弔電を送った (3月30日)。
- ・ 国立情報学研究所次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業著作権ポリシー共有グループによる「著作権の取扱いに関するアンケート調査」に回答した (3月30日)。
- ・ 学術著作権協会の「複写使用料支払いのための学協会現況調査」に回答した (3月30日)。

## お知らせ

### 特別展「花」と白亜紀の花化石のご紹介

植村 和彦 (国立科学博物館)

上野の国立科学博物館では特別展「花 FLOWER: 太古の花から青いバラまで」が開かれています。会期は6月17日(日)までです。この特別展では、花に関する様々な科学的側面を紹介し、さらに、花と人との関わりを取りあげています。また、本年はリンネ生誕300年にあたり、リンネに因んだ展示コーナーもあります。本会会員の皆様には興味のない内容と思われるかもしれませんが、この展示には、珍しい花化石も紹介されています。

花の咲く植物、すなわち被子植物は中生代白亜紀には出現していたことが化石で知られています。中国遼寧省のアルカエフルクツスは、花あるいは結実器官を伴った最古の被子植物のひとつですが、吉林大学蔵の化石が精巧な復元模型(福井県立恐竜博)とともに展示されています。また、ユリノキやモクレンに似た、アルカエアンツス(フロリダ自然史博物館蔵)は、約1億年前(白亜紀中頃)に被子植物が多様に分化し、同時に分布を拡げた時代に登場した、最初の大型の花化石です。

被子植物の初期進化の研究は、最近の20年間で大きく進歩しました。その主役は炭化



双葉層群のクスノキ科の花化石 (撮影: 高橋正道)

した小さな化石で、大きさがマクロでもミクロでもないことから、メソフォッシルとも呼ばれます。メソフォッシルの研究から、白亜紀の原始的な被子植物の多くが、実は小さな花をつけていたことが明らかにされています。日本の白亜紀後期層(双葉層群)から見つかった極小の花化石(新潟大学蔵)は、X線CT画像とともに展示されています。



北海道の白亜紀後期層には、特筆すべき保存状態の化石が含まれています。石灰質のノジュール中の植物（鈹化）化石は、細胞や組織の構造が変形することなく残されています。多数の袋果をつけたプロトモニミアなどの鈹化石切片（中央大学蔵）も見逃せません。特別展に出品した化石は、多くの基準標本を含む実物化石です。これら小さくとも重要な化石の世界をこの機会に是非ご覧下さい。特別展の詳細は下記：<<http://www.kahaku.go.jp/exhibitions/ueno/special/2007/flower/index.html>>

## 菌学教育研究会：菌類の多様性と分類

### 平成 19 年度前期講座開催のご案内

布村 公一（菌学教育研究会）

平成 19 年度 前期講座 4 日間コースを、本研究会 筑波センターで下記のとおり開催します。

講座日程

平成 19 年

6 月 15 日（金）顕微鏡の使い方 菌学教育研究会 浅井 郁夫, 土居 祥兌

6 月 16 日（土）プレオスポラ目の分類 弘前大学 田中 和明

6 月 17 日（日）午前：東アジアのマツタケ調査 京都菌類研究所 山中 勝次  
午後：食品菌学 50 年の歩み（マイコトキシン研究と共に）  
日本食品分析センター 宇田川 俊一

6 月 18 日（月）チャワンタケ類の分類 国立科学博物館 細矢 剛

なお、6 月 19 日（火）には、希望者にセンターの実習会場と顕微鏡などを開放します。

総会の開催

6 月 17 日の昼食時に講座会場で総会を開催する予定です。希望者にはお茶と仕出弁当 (500 円程度) などを準備します。

開催場所 菌学教育研究会 筑波センター：つくば市筑波 2074 番地

交通手段：申し込みをされた方にご案内します。

宿泊施設：センターの施設を利用される方は寝袋などを持参下さい。1 泊 1,000 円です。

つくば市営の筑波ふれあいの里は 1 泊 2 食付で 4,200 円です。

講座開催時間（目安）午前 10：00～12：30 および 午後 13：30～17：00

募集人員 1 講座 6 月 15 日は 10 名、6 月 16 日、18 日は約 25 名、6 月 17 日は約 50 名

参加費 1 日につき 一般会員 3,000 円 学生会員 2,000 円（非会員の方は 1,000 円増）

申し込み 申し込みはがきを送りますので、下記連絡先にメールか電話でご連絡ください。

その際、植物分類学会会員であることを申込書氏名欄に明記してください。

問合せ・連絡先

① 〒187-0032 東京都小平市小川町 2 丁目 1299-49

菌学教育研究会事務局 布村 公一 TEL & FAX 042-343-6836,

E-mail : bzg22155@nifty.com

② 〒300-4352 茨城県つくば市筑波 2074 TEL 090-5440-6882 土居 祥兌

（センターの電話は、029-867-2254 ですが、不在のことが多いです。）

E-mail : ydsotowa@ce.wakwak.com

③ 〒190-0182 東京都西多摩郡日出町平井 2196 - 152 近藤 和彦

TEL 042-597-1166 E-mail: hinodekon@ybb.ne.jp

## 2007 年度「信州フィールド科学賞」募集要項

村上 由利子 (信州大学)

### 1. 賞の趣旨

信州大学山岳科学総合研究所は、山岳科学研究のセンターとなることを目指して設立されました。山岳科学研究はフィールド・ワークが基本です。多くの若手研究者が「山」のフィールド・ワークに参画する契機となり、フィールド・ワークをやり遂げた達成感を味わうことが出来るようにとの願いを込め、さらには高校生・大学生の山岳地域における調査・研究を奨励することから、「信州フィールド科学賞」および「信州フィールド科学奨励賞」を創設しました。

### 2. 募集対象

#### ・「信州フィールド科学賞」

山岳地域におけるフィールド・ワークを基本として研究している若手研究者 (2007 年度末で 35 才以下) を対象とします。研究対象や分野は問いません。

#### ・「信州フィールド科学奨励賞」

I 種：山岳地域においてグループで調査活動を行っている高校生を対象とします。

II 種：山岳地域のフィールド・ワークに基づいてまとめられた大学等の (過去 3 年間に提出された) 卒業論文を対象とします。

### 3. 受賞

・「信州フィールド科学賞」：受賞者は毎年度 1 名とします。信州大学山岳科学総合研究所長名の賞状および副賞 20 万円を贈呈します。

・「信州フィールド科学奨励賞」：受賞者は毎年度 I 種：1 グループ、II 種：1 名とします。それぞれに、信州大学山岳科学総合研究所長名の賞状および副賞 10 万円を贈呈します。

### 4. 募集期間 2007 年 4 月 1 日～7 月 31 日

### 5. 応募方法

応募の書式は山岳科学総合研究所の Web サイト <http://ims.shinshu-u.ac.jp/> からダウンロードしてください。

#### ・「信州フィールド科学賞」

自薦を基本とし、応募の際に必要なとする書類は、山岳地域におけるフィールド・ワークの実績・今後の展開と「山岳科学」での研究の位置づけなどを 2000 字程度 (A4 用紙で 2 枚以内) にまとめた調書、研究業績調書 (口頭発表を含む) 及び論文等の別刷です。

#### ・「信州フィールド科学奨励賞」

I 種 (高校生)：応募の際に必要なとする書類は、活動実績を示す調書、調査活動によって得られた成果をまとめたもの及び所属高校長の推薦書です。

II 種 (卒業論文)：応募の際に必要なとする書類は、山岳地域におけるフィールド・ワークの実績と卒業論文の要旨を 2000 字程度 (A4 用紙で 2 枚以内) にまとめた調書、卒業論文のコピー及び指導教員による推薦書です。

### 6. 選考方法

応募者のなかから受賞候補者を選考委員会が選考し、山岳科学総合研究所運営委員会の議を経て、山岳科学総合研究所長が受賞者を決定します。

### 7. 授賞式

2007 年 11 月 17 日に松本市で行い、受賞者の講演及び受賞者の研究分野に関連する内容のシンポジウムを併せて実施します。

### 8. 応募書類の送付先および問い合わせ先

応募書類は郵送または持参するとともに、電子ファイルとなっている調書等についてはメー

ルへの添付書類でもお送り下さい。郵送の場合は、2007年7月31日必着でお願いします。  
 信州大学山岳科学総合研究所運営支援チーム  
 〒390-8621 松本市旭3-1-1 電話：0263-37-2432 FAX：0263-37-2438  
 e-mail: suims@shinshu-u.ac.jp

## 第2回車軸藻シンポジウムのご案内

野崎久義（東京大学）

公開シンポジウムを以下のように開催いたします。皆様ふるってご参加ください。

日時：平成19年7月21日（土）13:00～17:00

会場：信濃町公民館野尻湖支館（長野県上水内郡信濃町野尻303：JR信越本線黒姫駅下車、  
 バス野尻湖行き終点）

名称：車軸藻シンポジウム in 野尻湖・・・野尻湖の生き物の復元と保全を目指して・・・

主催：車軸藻研究グループ・野尻湖水草復元研究会

共催：独立行政法人国立環境研究所・長野県環境保全研究所・野尻湖ナウマンゾウ博物館

参加費：無料

問い合わせ：★長野県環境保全研究所環境保全部（安茂里庁舎 担当：樋口 澄男）

TEL：026-227-0381 E-mail：kanken-hozen@pref.nagano.jp

★長野県環境保全研究所自然環境部（飯綱庁舎 担当：北野 聡）

TEL:026-239-1031 E-mail:kanken-shizen@pref.nagano.jp

★野尻湖ナウマンゾウ博物館（担当：近藤 洋一）

TEL:026-258-2090 E-mail:nojiriko@avis.ne.jp

### プログラム

13:00～13:10 挨拶：信濃町（信濃町町長）

長野県（環境保全研究所長）

13:10～13:15 野崎久義（東京大学）「はじめに」

13:15～13:35 渡邊 信（筑波大学）「車軸藻類の環境科学における重要性」

13:35～13:55 坂山 英俊（東京大学）「車軸藻とは」

13:55～14:15 森嶋 秀治（千葉県立船橋古和釜高校）・佐野 郷美（千葉県立船橋芝山高校）

「手賀沼およびその周辺の車軸藻類ポテンシャル？埋土孢子からの発芽の可能性」

14:15～14:20 休憩

14:20～15:45 野尻湖水草復元研究会活動成果報告会

・・・ホシツリモ・水草帯の復元を目指して・・・

1. 山川 篤行（野尻湖水草復元研究会）「藻エビを食べたい・・・挨拶にかえて」

2. 樋口 澄男（長野県環境保全研究所）「野尻湖水草復元研究会の活動の概要」

3. 酒井 今朝重、酒井 昌幸（野尻湖水草復元研究会）「サポートダイバーの活動」

4. 北野 聡（長野県環境保全研究所）「野尻湖の魚類相の変遷」

5. 近藤 洋一（野尻湖ナウマンゾウ博物館）「水草復元活動を通して実施した環境教育」

6. 平林 章男（長野県生活環境部水環境課）「野尻湖における水質保全対策について・・・  
 第3期野尻湖水質保全計画を中心として」

15:45～15:50 休憩

15:50～16:20 浅枝 隆（埼玉大学）・山室 真澄（東京大学）「シャジクモ衰退原因の再検討」

16:20～16:50 笠井 文絵（国立環境研）「国立環境研究所タイムカプセル化事業における絶滅危惧種藻類の域外保全」

16:50～17:00 閉会挨拶：渡邊 信（筑波大学）

## 寄稿

## 日本における植物画の伝統と系譜

杉崎 紀世彦

日本に於ける植物画の沿革については、平安時代から江戸、明治、大正、昭和に至るまで、太田洋愛氏（1910～1988）が、『植物画の描き方』（アトリエ出版社）誌上で詳しく述べておられます。

1970年、太田洋愛氏の提言で、元人事院総裁佐藤達夫氏を顧問に、日本ボタニカルアート協会が発足。創立委員の太田洋愛、二口善雄、藤島淳三、佐藤廣喜、新沢明の諸氏による植物画展が、東京新宿小田急百貨店で開催され、当初は国立科学博物館本館と筑波実験植物園でも移動展が開かれていました。この植物画展は、日本ボタニカルアート展と名称を変え、今年で37回目を迎えます。

国立科学博物館本館と筑波実験植物園で太田洋愛氏を講師に植物画講座が開催されたことがきっかけになり、1983年、関東近辺を募集対象に、国立科学博物館筑波実験植物園主催の植物画コンクールが実施されました。同コンクールは、第5回から全国に募集対象を広げ、小学生、中高校生、一般の3部門に、多くの作品が応募され続けており、昨年第23回のコンクールが開催されました。この植物画コンクールは「植物画家への登竜門」ともいわれ、入賞入選者の中から多くの植物画



左から太田洋愛、佐藤達夫、佐藤廣喜、新沢明、二口善雄、藤島淳三の各氏（第5回植物画展。フェアリーリング画集より）



サクラ（松月） 杉崎文子・画

家が誕生しています。

1991年5月、日本植物画倶楽部が、植物画コンクール入賞入選者を核に、一般の植物画や植物愛好家を会員に発足。国内外で作品展を開くなどの活動を続けています。

海外のボタニカルアートとの交流も盛んですが、東京武蔵野市在住の黒川和典氏の国際交流への貢献度は特筆すべきものがあります。米国ピッツバーグ・カーネギーメロン大学ハント・インスティテュート（世界唯一の植物専門機関）で開催される国際展へ日本の作家を紹介、全米ボタニカルアート協会との交流、日本における英国王立園芸協会リンドレイブラリーコレクション展、シャーリー・シャーウッド博士コレクション展などは、黒川氏抜きでは成しえなかったでしょう。

各地のカルチャーセンターが、植物画講座や通信講座を開講したことなどにより植物画人口が増え、どこの植物画の展示会場も多くの来場者で賑わうようになりました。太田先生方を初代とすると、現在は4代目、5代目世代の方々が講師をしている例もあります。「アメリカやヨーロッパのように、日本でも、一般家庭に植物画を飾るようにしたい」と一念発起された太田先生のことを思う時、先生の夢が実現し、植物画人口が増えたことを、

弟子の1人として本当に嬉しく思います。

ところが、植物画人口の増加にともない、新たな問題点も指摘されるようになってきました。それは「植物学者と植物画家との接点が少なくなってきている」ということです。このことは、科学（植物学）と芸術が結びついた植物画の世界でこれから解決してゆかなければならない重要な課題だと思えます。

このような大切な時期に、新潟大学高橋正道先生から、白亜紀の植物化石の絵を描いて欲しいとのお電話をいただき、植物学の先生とのつながりが生まれたことと、御学会のニュースレターに寄稿させていただく機会をお与えいただいたことに感謝いたしております。



ブドウ（ナイヤガラ） 杉崎紀彦・画

ホームページのデザインが新しくなりました！

そしてアドレスも変更になっています。

以前のアドレス <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsps/> でも自動的にジャンプしてくれますが、リンクなどされる場合は、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cgi-bin/jsps/wiki/wiki.cgi> の方が接続が早いですよ。

#### 編集後のひとこと

皆さんゴールデンウィークはいかがすごされましたか？私は調査と、みどりの日の出勤と、ニュースレターの編集で終わりそうです。天気がよいので妻はテーマパークに連れて行けど、小2の息子はみんなで自転車に乗って出かけようと、3歳の息子は一緒にサッカーをして遊べと、それぞれに言い張ります。妻よ、子供たちよ、お願いだからお父さんの仕事も少しは理解しておくれ。無料開園日の植物園で桜を見ながらお弁当を食べるのだって、いいじゃないか。でもやっぱりそれだけじゃサービス不足？

By 発行人

## 追悼

## 全国を行脚した車軸藻学者、加崎英男先生逝く

野崎 久義 (東京大学)

今から丁度 30 年前、私は東京都立大学牧野標本館の門戸を叩きました。私のような不良学生をその時暖かい笑顔で迎えてくれたのが加崎英男先生でした。それ以来、学会参加や車軸藻の現地調査等で先生は我々と共に活動し、その間我々を暖かくご指導して下さいました。しかし、不幸にも先生は本年 3 月 27 日 89 年間の生涯を終えられました。ここに長年の感謝の意を表し加崎先生のご略歴とご研究を紹介したいと思います。

加崎先生は大正 6 年 8 月 13 日に東京でお生まれになり、東京高等師範付属小学校（現在の筑波大学付属小学校）をご卒業された後、佐賀高等学校に入学されました。この時サッカーをはじめたものと思われ、晩年は 80 歳になるまで、旧制高校出身者のサッカーの試合をしていました。昭和 12 年に東京帝国大学理学部植物学科に入学され、第二次世界大戦をはさんで、昭和 15 年から 22 年まで同大学大学院で植物分類学をご研究されました。研究室の場所は今の東京大学理学部 2 号館で、同期にコケ分類の服部新佐がいます。指導教官は中井猛之進であり、東京大学では牧野富太郎の授業も受講されました。加崎先生によると牧野の授業はとても楽しく、まるで「漫談」のようであったとのこと。加崎先生が生涯研究された「車軸藻」も牧野の勧めによります。

加崎先生が大学院時代に出版された *Charophyta Japonica* (1~4) (植物研究雑誌, 1941) は戦地に出征する直前の論文であり、キヌフラスコモ等が新種記載されています。イントロダクションがドイツ語で、記載がラテン語の「戦地での死を覚悟した」かのような気迫のこもった論文です。終戦を中国で迎えた先生はしばらくの間、蒋介石の軍の戦車



幻の車軸藻ホシツリモを求めて河口湖の調査船上の加崎英男先生 (撮影：野崎久義, 1996 年 9 月 24 日)

の操縦をしていたとのこと。日本に帰ってからは全国の大湖沼の車軸藻の分布と分類の研究を精力的に行なわれ、その集大成が *The Charophyta from the lakes of Japan* (服部植物研究所報告 1964) として出版されています。この論文は日本がまだ「公害」を体験していない太古から伝わる環境における車軸藻の生育と分布を報告しており、2000 年のレッドデータブックを編纂する上で非常に貴重なデータとなりました。飛行機も自家用車もなく、終戦直後の全国 46 湖沼をほとんど一人で調査したとのこと。車軸藻のサンプルを納めるための「缶から」がカラカラなるリュックサックを背負って全国を行脚したそうです。当時の思い出として、「一つ目小僧

を四国で見たことがある」と先生は晩年になって言っていました。採集で非常に疲れた時に後ろから子供の声があるので振り返ると一つ目小僧で、恐ろしさのあまりに一目散で逃げたとのこと。日本がまだ環境汚染されていなかった古き良き時代には、一つ目小僧が時々現れて真面目な分類学者をからかうようであったらしいです。

加崎先生は昭和22年に東京都立大学の前進である旧制都立高等学校に講師として就任され、同24年4月の都立大学発足と同時に理学部講師、同26年4月に助教授、同47年8月には教授に昇任、自然史講座を担当しました。更に都立大学を同56年3月に退職し同大学名誉教授になられ、同62年3月に東邦大学理学部大学院の教授の定年を迎えるまでの実に40年の長きにわたって教育および研究に尽力されました。特に都立大学在職中は牧野標本館の設立と運営に尽力された他、小笠原植物研究委員長や東京都立大学附属高校の校長も兼任されています。また、昭和56年1月から同59年12月まで日本植物分類学会の会長も務められています。先生は東邦

大学の定年を迎えられた後の長い間も国立環境研究所の客員研究員として絶滅危惧種である車軸藻の研究を精力的に続けられました。80歳以上の高齢であるにもかかわらず、全国再調査も労力を惜しまず、研究協力とご指導をして下さいました。その成果の一部ではありますが、先生が出征前に記載した新種キヌフラスコモはWood (1965)によりフタマタフラスコモのシノニムになったのですが、タイプ産地の芦ノ湖から再発見された材料を用いた走査型電子顕微鏡の観察(1998, Eur. J. Phycol.)と分子系統(2002, Phycologia)で独立種としての地位を自ら復活させています。また、先生が記載した手賀沼原産のテガヌマフラスコモを再調査によって自ら絶滅種にランク付けし(1995, 藻類; 2000, レッドデータブック)、一方では原産地の手賀沼湖底の泥から生きたテガヌマフラスコモの再生にも成功しています(2002, 植物研究雑誌)。このように加崎先生は大正から平成に至る日本の激動の時代を時代を生き抜き、全国を行脚して日本の車軸藻を発見し、その最期まで見届けられた不世出の分類学者であります。

## 本の紹介

### 農業と雑草の生態学：侵入植物から遺伝子組換え作物まで

種生物学会／編 浅井 元朗・芝池 博幸／責任編集, A5判・344p＋カラー口絵4p, 文一総合出版 ISBN 4-8299-1068-9

定価：3,780円(税込) 今回の割引価格は3,024円(税込)

人為の影響が非常に強い農地を生態・進化研究の場としてとらえた意欲作。合わせて人為のあり方を変えてしまう社会と農地生態系のかかわりも考える。

#### 目次

誌上討論：農業の生態系を通して見えるもの

——生産と科学と社会 清水 矩宏・矢原 徹一・大塚 善樹

#### 第1部 外来雑草

第1章 外来雑草の蔓延：イチビの侵入経路 黒川 俊二

第2章 麦畑に侵入するカラスムギ：出芽の不斉一性という生き残り戦略 浅井 元朗

第3章 外来牧草の野生化：エンドファイトを利用する



ネズミムギ 山下 雅幸

コラム 外来タンポポ 芝池 博幸

第4章 雑草リスク評価：オーストラリアとニュージーランドの事例を中心として

西田 智子

## 第2部 除草剤抵抗性雑草

コラム 水稲作における除草剤の役割：スルホニルウレア系除草剤が登場するまで

伊藤 一幸・内野 彰

第5章 水田雑草におけるスルホニルウレア系除草剤抵抗性とその進化 内野 彰・芝池 博幸

第6章 雑草から作物へ：除草剤抵抗性遺伝子を活用した遺伝子組換え作物作出技術の開発

清水 力

コラム 除草剤の種類と作用機構 清水 力

## 第3部 遺伝子組換え農作物

第7章 遺伝子組換え技術を用いた乾燥・高塩・低温ストレス耐性植物の作出

伊藤 裕介・篠崎 一雄・篠崎 和子

第8章 遺伝子組換え作物の花粉飛散と交雑：不確実性を乗り越えるために

芝池 博幸・松尾 和人

第9章 遺伝子組換え農作物と生物多様性：農場規模評価（FSE）の意義 澤田 均

## 第4部 雑草を究める

雑草の生活史戦略の多様性をどうみるか：一年生雑草を例に 三浦 励一

雑草を見分け、調べる 浅井 元朗

## 割引購入の方法

下記の必要事項を記入の上、菊地宛にメール、ファックス、はがきで注文してください。割引価格は3,024円（税込）ですが、このほかに**送料が1冊につき210円必要です（4冊まで）**。5冊以上を同一箇所へ一度に送る場合の送料は無料です。勝手ながら、本案内による割引購入は2007年12月末日までとさせていただきます。

- 1 「分類学会ニュースレターの割引購入紹介による」と明記してください
- 2 本のタイトル：「農業と雑草の生態学；侵入植物から遺伝子組換え作物まで」と記してください

- 3 必要部数：
- 4 注文者氏名：
- 5 送付先住所：
- 6 電話番号：
- 7 公費購入の場合は必要書類と注意事項（日付ブランク、宛先など）：

申込先：文一総合出版 担当：菊地 千尋

メールの場合：charlie@bun-ichi.co.jp

ファックスの場合：03-3269-1402 必ず宛先（菊地宛）を表記してください。

はがきの場合：〒162-0812 東京都新宿区西五軒町2-5 株式会社文一総合出版 編集部 菊地宛  
代金の支払い：代金は後払いです。本と一緒に請求書、郵便振替用紙をお送りしますので、振替用紙を利用して郵便局から振り込んでください（手数料は無料）。なお、銀行振り込みも可能ですが、その場合は手数料がかかります。 (藤井 伸二・菊地 千尋)



## 北海道の花，日本海草図譜，北海道高山植生誌

最近，北海道から相次いで図鑑や研究書が出版されました。その一部をご紹介します。

### ■梅沢 俊『北海道の花』四六変型判 464 頁，

定価 2,940 円 (割価 2,400 円)

ロングセラーとなった旧版を全面改訂し，北海道に生育する外来種を含む 1,900 種を収録した，地方版フィールド図鑑。花の色を頼りに調べることができるため，初心者にはとても使いやすい，初版刊行以来，定評があった。一方で，学名の正確さや解説や用語の詳しさなど，このような地方版フィールド図鑑としては完成度が高い。旧版は 3 名による編著だったが，今回から植物写真家として広く知られる梅沢氏の単著となった。外来植物なども極力最新の情報を取り入れており，北海道フロアの現状を知る上でも参考となる図鑑である。



### ■大場 達之・宮田 昌彦『日本海草図譜』A3 判 128 頁，

定価 25,200 円 (割価 20,200 円)

水草の中でも網羅的な図鑑がなかった海草についての，初の本格的な図鑑。A3 判と，きわめて大ぶりの本である。スキャノグラフィ法の活用による生時の色を忠実に再現したカラー図版が特徴で，全種について全草写真と細部の拡大図版がスキャン画像で掲載されている。分布図，栄養体による検索表，海草の群落体系，海草と人との関わりなどの章を備え，日本産 5 科 10 属 30 種について詳しく解説している。海草類の同定には必須の文献となるだろう。



### ■佐藤 謙『北海道高山植生誌』B5 判 708 頁，

定価 21,000 円 (割価 16,800 円)

北海道の高山植生の成立を，植物相と植物群落の両観点から植物地理学的に分析したモノグラフ。収録範囲は，いわゆる主要 4 山系（大雪山系 / 知床山系 / 日高山系 / 夕張山系）に始まり，阿寒山系と斜里岳 / 利尻岳 / 日本海側多雪山地 / 支笏・洞爺山地 / 北見・天塩山地 / ハイマツ低木林を欠く山岳，それに低標高の特殊な立地に成立する高山性植物群落として，礼文島 / 超塩基性岩地 / 石灰岩地 / 安山岩質集塊岩地 / その他の地質からなる露岩地 / 火山荒原 / 硫気孔原 / 海岸風衝地 / 風穴地の植生に及ぶ。多数の常在度表の他，高山植物の分布型組成や文献も充実しており，資料価値の高い本と言えよう。



※いずれの書籍も，本学会員は送料実費負担により，著者割引で購入できます。申し込みは北海道大学出版会まで。E-mail: hupress\_1@hup.gr.jp。または，FAX：011-736-8605。

(持田 誠)

## いきもの便り

## ムシできない話・その2・

三島 美佐子 (九州大学)

このところ、ひたすらブナ *Fagus crenata* に張り付いている。ブナには、十数種のタマバエが寄生して、それぞれ違う形のムシコブを作る。1種の寄主植物が、こんなに多種のムシコブ形成者にたかられるのは、このブナ属とコナラ属（こちらはもっぱらタマバチにたかられる）がダントツだ。何故その群が？と思うけれど、今のところ答えはないらしい。

さて、この4月下旬から、ブナに寄生するタマバエ科を専門としているSさんと、白山麓にある林業試験場に詰めている。朝5時に目覚めて6時から朝食をとり、7時前には調査地に行き、首っ引きで観察と採集、午後3時には調査完了。卓上作業の後ご飯を食べてひとつ風呂浴びたら、夜10時前には布団に入る。某調査隊のような毎夜の宵越しの酒宴もなく、極めて健康的な調査日課だ。陽の明るさがある限り調査と採集と移動の贅(?)を尽くすのもよいが、こういう淡々とした調査（とはいえ現場ではアツい戦いが繰り広げられているのだ）もなかなか新鮮だ。

今回のターゲットは、ブナの葉のオモテとウラに、同じ形だけれども付き方の違うムシコブを作るブナカイガラタマバエ。このタマバエは春先に羽化して交尾をし、開きかけの新葉に卵を産む。こういう生活史を持つものは、寄主植物の開葉時期との同調（シンクロ）が極めて重要だと言われている。例えば福岡市内の調査木のシロダモの場合、その周辺のシロダモがほとんど開葉しきってしまう頃にも、まだタマバエが産卵可能な、ほころぶ直前の新芽をつけている（つまりこの調査木の開葉は、そのエリアの他の個体より少し遅い）。それで、その木に寄生しているタマバエは、毎年毎年その木にムシコブを作っている、というか、作らざるを得ない。もしこのシロダモの開葉かタマバエの方の羽化が早まったり遅くなったりすると、シンクロは崩れ、タマバエたちは産卵先を失ってしまうことになるわけだ。実際、昨年春は、このシロダモの開葉が少し早かったのだらう、ムシコブの数はがくっと減ってしまった。

今回のブナ調査木10個体をみてみれば、開

葉時期にかなり個体差がある。それにそれぞれのブナ1個体の中でも、開葉が始まる枝の場所などに法則性はない感じで、全体的にだらだら開葉していく。これまで植物の開葉状態を気にかけることはほとんどなかったけれど、注意するようになってみるとなかなか面白い。

ところで、ブナのタマバエを調査し始めてわかったけれど…日本人は、ブナがとっても好きなのですね。これまで私は、首都大の藤井さんの論文を拝読する程度で、それほどブナに興味はなかったけれど、いざ書店に行けば、ブナ林本があるわあるわ…。九州の背振山や野峠（英彦山）のブナくらいしか意識して見ていなかった私は正直、はあ、そんなにいいのですかねえ、と思っていた。が、石川に来てみたら、九州のものよりはるかに大きく薄手の新葉から透ける光がなんとも清楚で心洗われる感じで、確かによい。白神などは、さぞかし美しいのでしょうか。ブナを見つめるSさんのうっとりとした表情も、ようやくわかるようになってきた。

さて、最終日の夕食には、地物と思われるソバが出た。「いやー、ブナ林が発達してるとこのソバはうまいっすよ♪」とは日本各地のブナ林をめぐるてきているSさんの言。本当かどうかは知らないが、確かにそのソバは風味がよく、ソバ粉含有率の高さを思わせる食感も絶妙で、非常においしかった。明日からはSさんとわかれ、盛岡にある試験場での調査になる。今回の調査はとにかく、天気と気温とブナの開葉程度に左右される。思いのほか暖かそうな盛岡で、ブナはどれくらい開葉がすすんでしまっていることやら…。(おわり)



左：4月17日、下見に来たときの調査地の様子。開葉が始まりつつある。右：葉表に産卵中のブナカイガラタマバエ。もう少し開いていない葉や、ウラ型ならやや堅めの新芽にも産卵する。(撮影：三島美佐子)

## 空飛ぶ精子

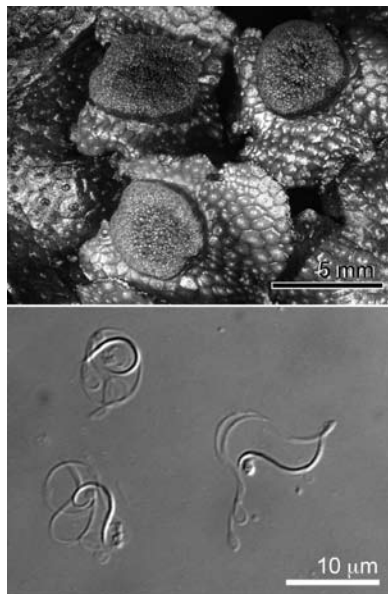
嶋村 正樹 (広島大学)

コケ植物の受精様式に関する教科書的な説明は、「造精器から泳ぎだした精子が水中を泳いで造卵器の内部の卵に達し、受精する」というようなものだろう。上記の説明では、水の層が造精器と造卵器の間に連続的に存在する場合のみ、受精が成功することになるが、実際には、過酷な水条件を乗り越える工夫があるらしい。

あまり知られていない事実だが、コケ植物のタイ類には、精子を空中に放出するものがある。以下にジャゴケ (*Conocephalum conicum*) を用いた観察方法を記す。4-5月頃、雄器床をつけたジャゴケの雄株を採集し、シャーレの中に入れ、霧吹きで全体を湿らせた後、シャーレの蓋をしめる。雄器床中の造精器が成熟していれば、数分で雄器床から精子が吹き出し、シャーレの蓋に乳白色のスポットが生じる。このスポットを少量の水で薄めて、顕微鏡で観察すると、活発に運動する精子をみる事が出来る。佐藤 (1960) は、ジャゴケの精子の電子顕微鏡観察用の試料を調整する際、上記のような方法を用いているが、タバコの煙を吹きかけることで、精子の放出がさらにさかんになることも見ている。精子を空中に放出するしくみについては詳しく調べられていないが、雄器床中の造精器が、周囲の細胞の膨圧で爆発的に押しつぶされることに由来すると考えられている。深さ3 cmのシャーレの底に雄器床をつけた葉状体を並べて実験しても、シャーレの蓋まで精子が到達することが確認できることから、隣接する植物体の上に精子を送り込むには、十分な散

布能力があると考えられる。最終的に造卵器に達するためには、水中を泳ぐ必要があるのが完全な「風媒」とは言いえないが、雌雄異株のこのコケにとっては、厳しい水分条件下で受精効率を高めるための戦略として役立っているのかもしれない。

セン類においては、生殖器官の周囲を好んで生息するトビムシやダニなどの微小な節足動物が、精子の運び手として効率的に働いていることが実験的に示されている (Cronberg et al. 2006)。陸上植物の受精でみられる、風媒、虫媒といった戦略の進化は、コケ植物にまで、その原型を求めることが出来るのかもしれない。



左：ジャゴケの雄株。直径5 mmほどのイボ状の突起が雄器床。右：放出されたジャゴケの精子。(撮影：ともに嶋村正樹)